

門が妻女は詮方なく、此上は尋常に自害して恨を泉下に報
 ぜんと、奥に入りて支度するを、三右衛門少し存寄るかた
 も侍れば、一先づ越中の方へ立退き給うて、時節を相待ち、
 若子を成長なして、世に立て給へと諫めて、越中へ立退か
 せ、荒木といふ所に隠し置き、後成長して荒木六兵衛と稱
 し、利家卿越中へ發向し給ふ時被召出、千石の采地を賜は
 り、今に至り子孫繁昌す。松田が家に傳れる聖徳太子の尊
 像あり。かたみにもせよとて、松田が妻女三右衛門に與へ
 たりしを、後に今田井村の道場に安置して靈驗掲焉、毎歳
 二月廿二日には參詣群集しけり。元は本願寺の寶藏に有り
 しを、何れの頃にか松田に給はりし也。とあり。飛耳襖錄
 には、此時松田が妻女茫然として途方を失ひ、此の上は力
 なし、尋常に自害して、夫次郎左衛門の死出を伴はんと
 いふを、馬捕三右衛門所詮爰を遁れ、重ねて仇を報い給ふべ
 しと諫めつる。主人の妻子を伴ひ、越中へ赴き、荒木とい
 ふ所に落付き、爰に住居せしめ、彼の幼少の子後に成長し
 て荒木六兵衛と稱しけり。利家卿越中發向の時、松田次郎
 左衛門が由緒を聞召され、甲斐く敷者の子也と感じ思召

し、召抱えられ家祿千石下し給ふ。とあり。三州健甕餘考
 には、松田が妻子をば、舍人三右衛門携へて越中に走り、
 荒木といふ處に隠し置きたり。其子孫荒木六兵衛一作小とい
 ふ者に至つて、高德公越中へ發向し給ふ時、城端にて天正
 十七年に策仕し、采地千石を賜へり。即ち今の荒木善太夫
 の祖也。とあり。又加賀古跡考には、松田次郎左衛門が仲
 間といへるもの、松田が妻子を扶けて越中國へ逃退き、數
 年経て後六右衛門は侍と成り、太子像は田井村の道場へ贈
 り與ふ。と見え、飛耳襖錄にも、松田が馬捕六右衛門後に
 荒木六兵衛と改稱し、利家卿被召出之時、松田が後室より
 太子像を譲り與ふ。六兵衛おもふやう、靈像を俗家に置く
 は恐れありとて、田井村の道場へ納めたり。とあり。此の
 傳説に據れば、彼の馬捕が子孫なるにや。

○^{山上}上山善右衛門舊邸

延寶の金澤圖に、荒木善太輔相角山上善右衛門。とありて、
 西末寺の地内照圓寺の西隣也。子孫世々爰に居住す。
 ○山上善右衛門喜廣傳

藩國官職通考に云ふ。山上善右衛門は、利常卿寛永五年召

出され、五十俵を賜ひ、其後壹曲尺の儀御尋也。七堂伽藍
 地取等指上、委細申上げ、る處、御感ありて、正保三年に
 知行百石賜はり、其子伊左衛門に至りては、再び切米を賜
 ふ。とあり。小松城考に云ふ。明暦元年天滿宮を梯川濱に
 新に建立あり。本社は良匠山上善右衛門に命ぜられ、京都
 北野天神社の社狀を四分之一に縮造すと云ふ。其詳なる事
 は、天神社記にあり。と記載す。今按ずるに、右社殿造立
 の事は、三壺記に、明暦三年に小松懸橋の川縁に天滿天神
 の社を建立被仰付、御大工山上善右衛門に指圖被命、善盡
 し美盡し、造營成就して、松、梅、櫻の植木等迄夫れく出
 來、御子孫榮久の棟札をば千岳和尚に被仰付。といへり。
 その文の末に、大工入唐自横山善春十七代山上善右衛門喜
 廣と記さる。國事昌披問答に、大工に二流あり。建仁寺流
 は横山權頭吉春より、山上氏傳來すといへり。

○伴八矢下邸跡

延寶の金澤圖に次の如く載せたり。龜尾記に、伴氏の下邸
 は、慶長年中に賜はり家士の居住地とす。といへり。明治四
 年戸籍編成の時、下屋敷の名稱を廢し、象眼町へ屬せしめ

